

桶狭間 = 「鳴海原」 合戦考

名古屋城調査研究センター所長
服部英雄

課題

- 今川義元はなぜ自ら尾張国まで出陣したのか。
- 圧倒的に劣勢のはずの織田信長はなぜ勝利できたのか。
- おはなしすること
- 今川義元本陣の位置（「鳴海原」尾張藩学者は大高緑地説）
- 海の戦い（松平元康兵糧入れは海路）
- 気象条件：五月の降雹（空梅雨で雨乞い）

忘れられた鳴海原：合戦場はどこか？

義元一戦は鳴海原(『愛知県史』資料編11:50)

- 去る五月十九日、天沢寺殿尾州鳴海原に於いて一戦、味方勝利を失うところ、父宗信、敵を度々において追払う、
- 数十人手負仕出し、相支えるといえども叶わず、同心・親類・被官数人、宗信一所に討死
- 永禄3年12月2日氏真判物(土佐国蠹簡集)

戦場はどこか：「おけはさま」表記は信長公記と一部記録。今川方は鳴海原（鳴海庄：鳴海原はこれ以外の史料には出ない）。愛知郡鳴海村と知多郡桶狭間村

- 尾州口不慮之御仕合（9、三浦正俊）
- 尾州一戦（14、氏真）
- 尾州大高口（16）
- 於尾州、天沢寺殿御討死（23）
- 尾州一戦（35）
- 天沢寺殿尾州鳴海原に於いて一戦（50）宗信一所に討死：永禄三年12月2日氏真判物
- 三河物語（64）棒山の取手*棒山という字名は未検出

- 定光寺年代記（66）；義元尾州鳴海庄にて
- 享禄以来年代記（67）：出陣尾州知多郡→知多郡桶狭間村・東阿野村・大脇村・落合村
- 大脇村に館はさま
- 「尾州なるみ・おけはさま」（水野勝茂覚書）
- 大脇は知多郡
- * 「寛文覚書」大脇村に「今川義元墓所
長百間程構当村石塚山之内二于今有七
之石メ続「大脇（ママ）景塚山尾跡、長間（ママ）義
南遺」に間、大脇（ママ）サ五十余間（今川義
元宮之」

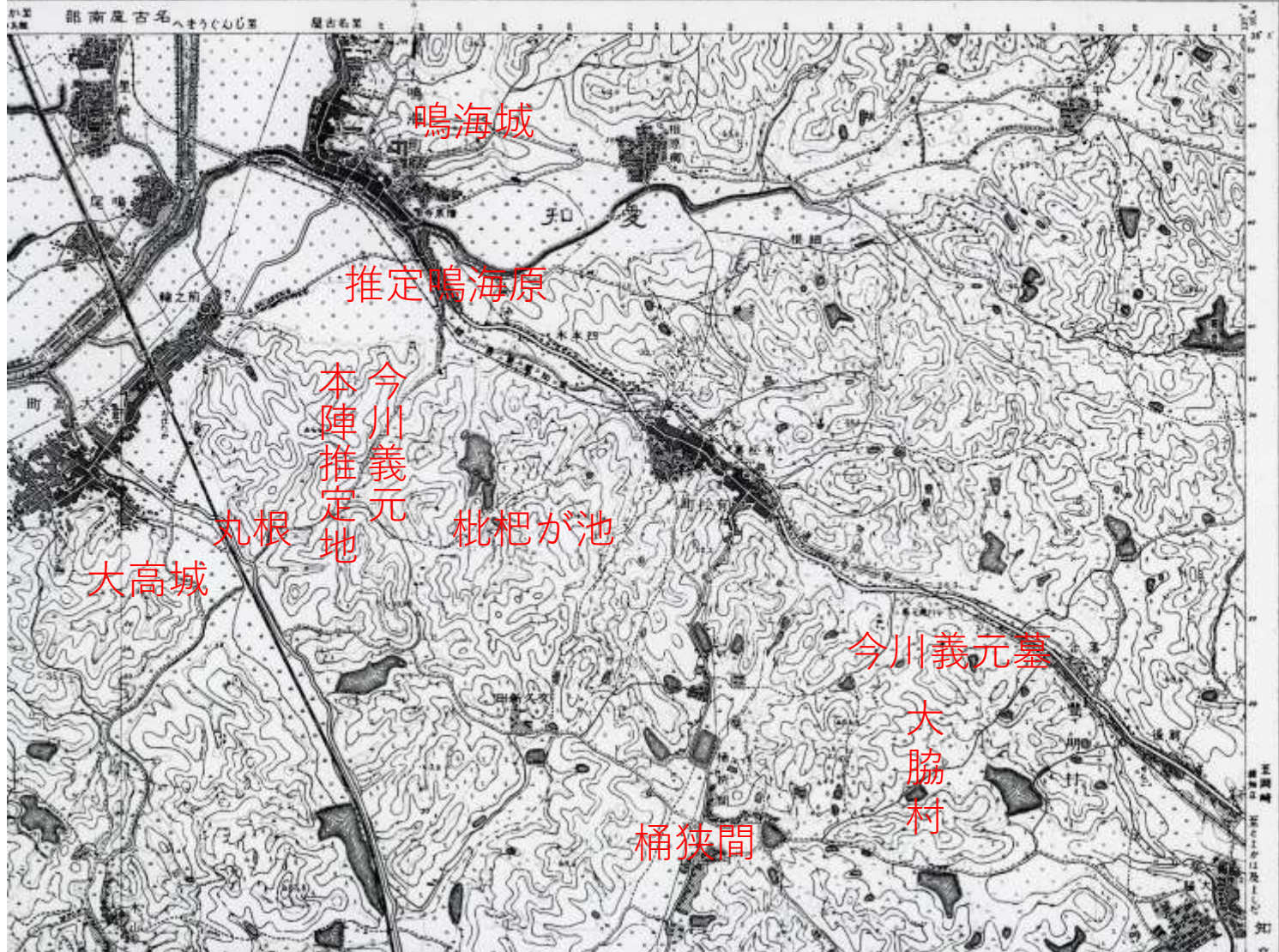


蓬左文庫桶狭間絵図、本陣は今の大高緑地：琵琶池西か

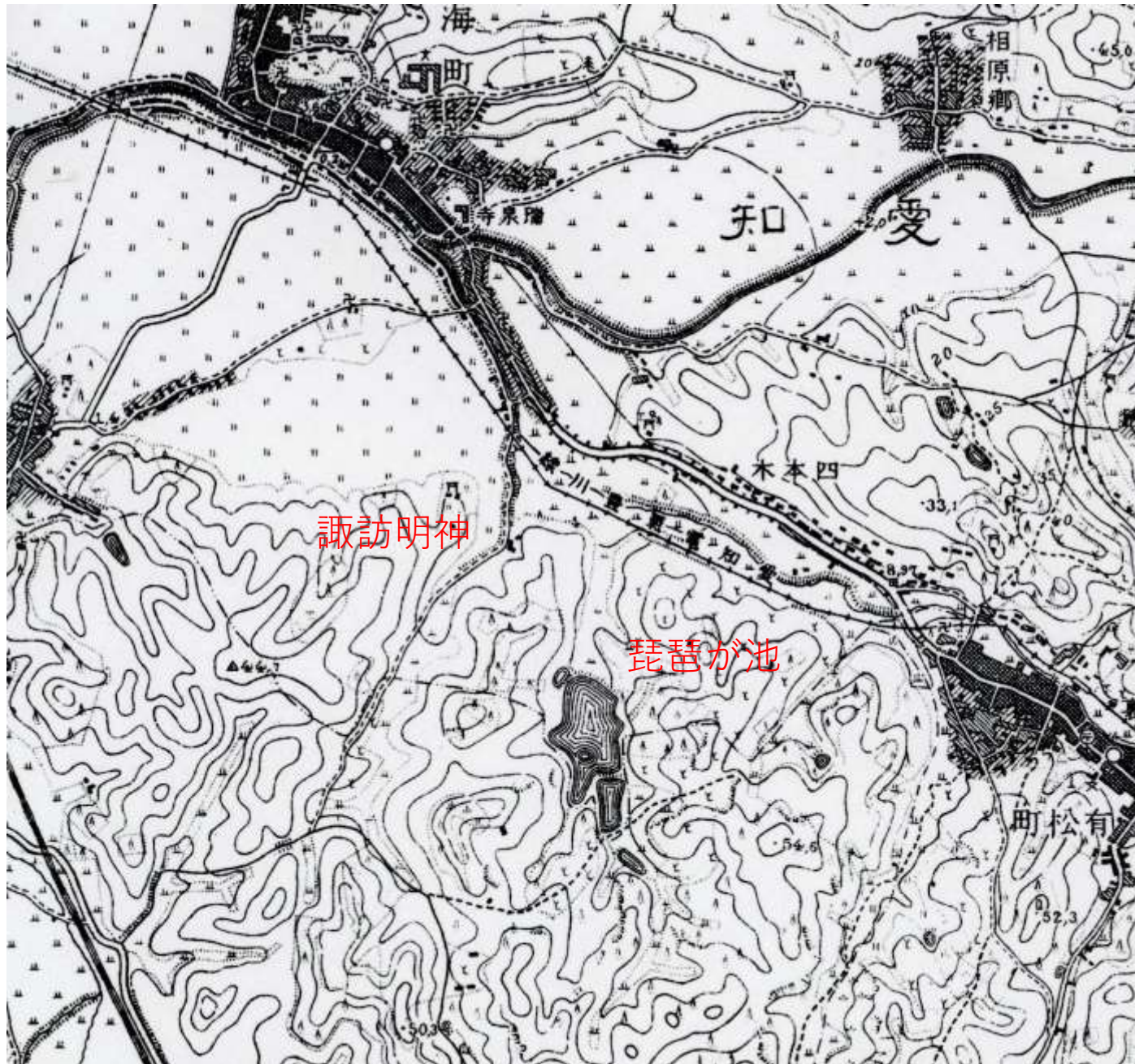


鳴海

鳴海安 鳴海延 鳴海安
鳴海知 鳴海延 鳴海安
鳴海豊 鳴海河三 鳴海安



二万五千分一地形圖名古屋近傍十號并十四圖
名古屋二號名古屋南區ノ二



神明訪詣

琵琶が池

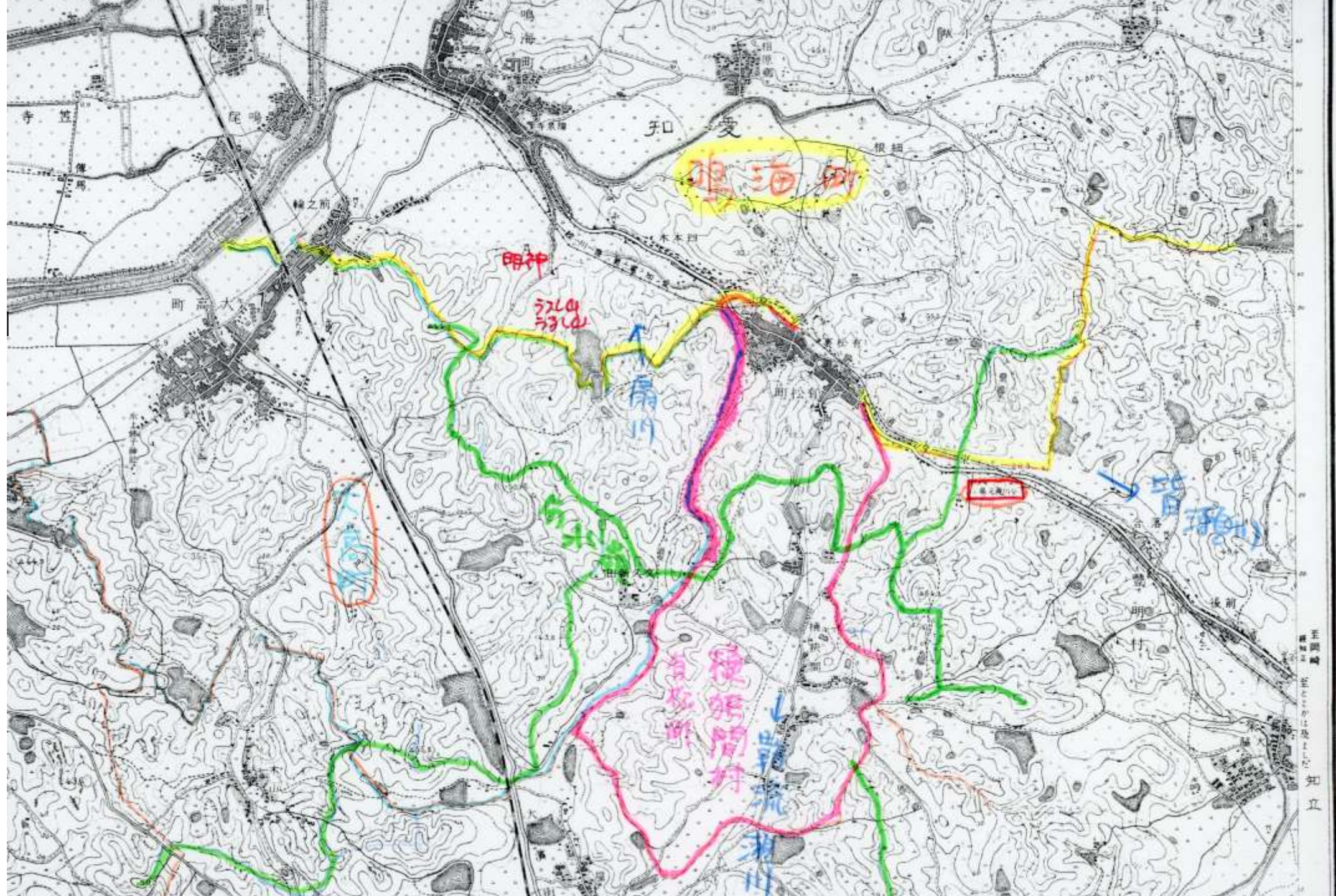


内シ山：琵琶が池



村界
郡界

分水嶺
扇川
鞍流瀬川
皆瀬川



桶迫間村は知多郡（その出村の有松も知多郡）、鳴海原は愛知郡

• 尾張徇行記 5

• 知多郡

• 花房庄 有松村 新田 此村ハ東
海道筋ニアリ、元桶迫間村ノ支
コニ新町ヲ造立シ（中略）

•

• 知多郡之内桶はさま村新町之儀
諸役令免許候間望義之者有也仍如件
ひてハ彼地へ可被越者也仍如件

• 慶長拾三申二月十八日

• 寺西藤左衛門書判

• 原田左 門 書判

• おけはさまにて

• 伝左衛門

• 作十郎

•

大高城・鳴海城は海城（川は干満）

- 『信長公記』
- 「鳴海の城、南ハ黒末の川とて入海、塩の差引、城下迄在之
（中略）今川義元、沓懸へ参陣、十八日夜に入、大高之城へ兵
糧入、無助様に、十九日朝塩（潮）の満干を勘かへ、取出を可
払之旨必定と相聞

大高之南 大野(佐治) ・ 小河(水野) 衆被置

- 織田方の配陣記事の末尾
- 中島砦の水野配下、梶川平左衛門
- 『信長公記』巻一・永禄十一年十月二日撰津池田城攻めの記事に「**水野金吾内に無隠勇士** 梶川平左衛門」
- 丹下砦 水野[帯刀忠光](#)
- 『常山紀談』に「水野太郎作清久一番に首を取る」



鶉殿長持の弟、長祐および長照が大高城主：長照は今川義元甥

「永禄二年先屋形様、鶉殿長助・長宗をして尾州大高の城を守らせ給ふ」
落照露言抄（長宗は藤太郎長照）。

•去年十一月十九日、去五月十九日於尾州大高口、
兩度合戦之時、太刀打被鏝疵三ヶ所云々、無比
類働尤神妙候、弥可抽戦功者也、仍如件

• 六月十二日 氏真判

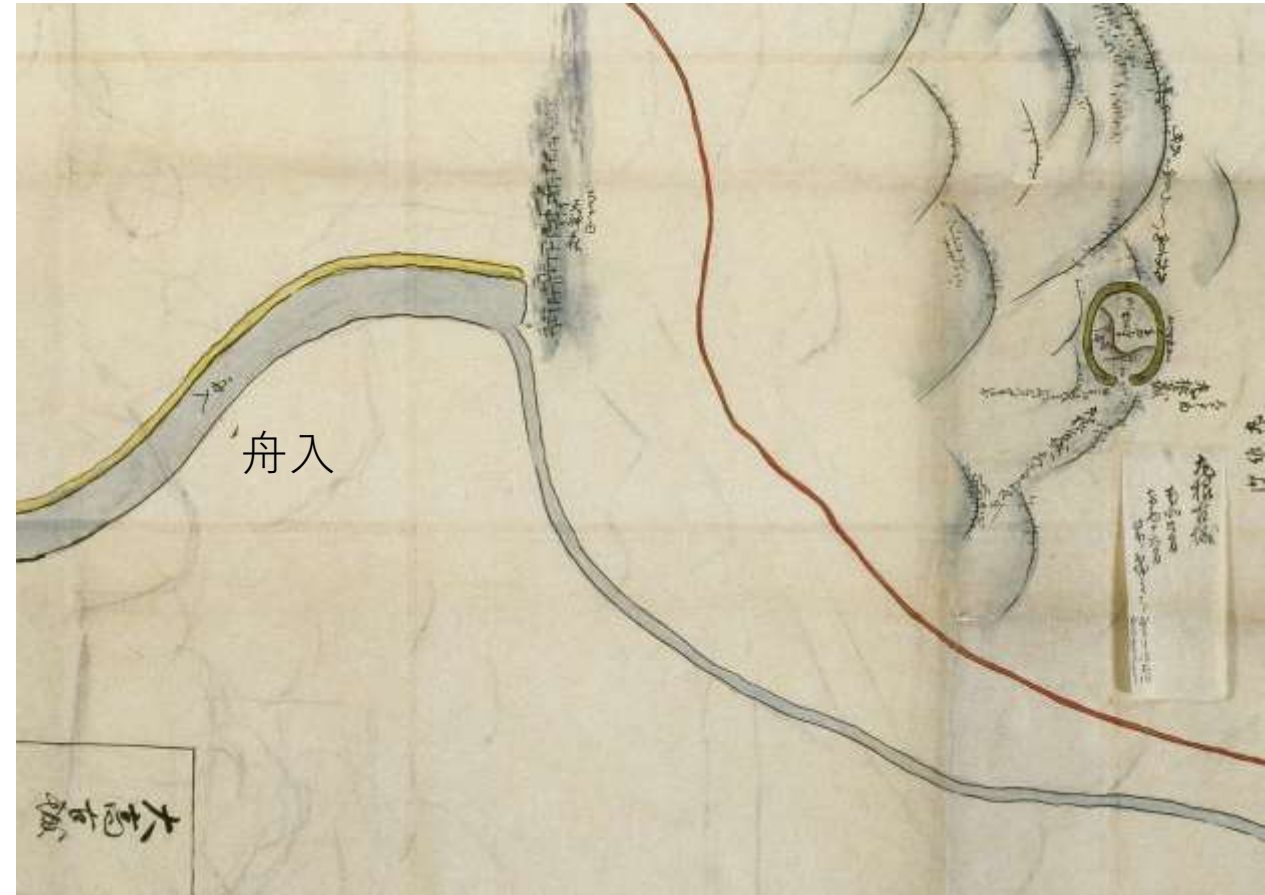
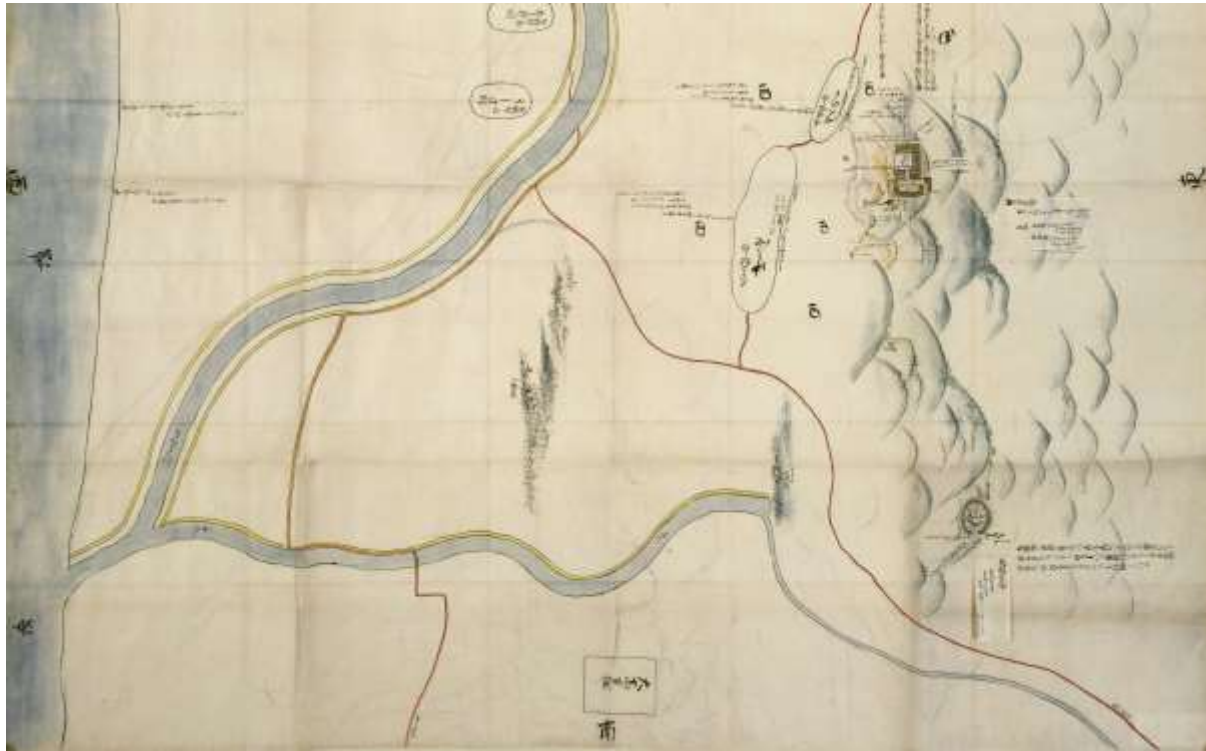
• 鶉殿十郎三郎殿

• 某（藤太郎）——長将（藤太郎）——長持（三郎）——長照（藤太郎）

• —長祐（十郎三郎）



尾州知多郡大高之内鷲津丸根古城図(大高兵糧入)この兵糧入図には三河からの陸路は書かれていない。



善照寺砦（標高25, 9M、鳴海城三角点
で14,2Mよりも高い）







5月19日は五月雨、梅雨なのになぜ義元は鳴海山や桶狭間山に陣を置いたのか。じつはから梅雨だった。5月は4日しか雨が降らない。26日晴れ。

『御湯殿上日記』京都の降雨

- 永禄二九文のきよ、三にが通、年降雨り降この五月はあ六雨が少炎旱、合な雨すと、日とはに梅な旱、十戦る。のる。一当日五季。の月節け、十日はなっ
- 永禄三年五月十九日1560・06・12

祈雨

- 五命に『書所記』月た雨上本にと、月じは細湖』十の（は列梅は二ら近川お水に三か、湯日全前か、九（で家び、渴れ以六殿本体線、十日瑞雨記『水ば降月上史ががた。に光乞』足し降で二日料空尾は院い（古）に利河雨、十記稿梅張諸記）（当年世にあおにが、で空寺に六月有文、に妙ので良た。九かて六月有文、『た足奈っ夏月か、に六共照、『た足奈っ夏月か、に祈雨が日、同力寺六っ祈以日日こ、八法はあで（九る

- 水をまくるかごとく、後ろへ、くはつと崩れたり、弓・鎗・鉄炮・のほ((昇))り・さし((差))物、算を乱すに異ならず
- 「塗輿を捨て、くつれ逃げけり」、「旗本は是也、是へ懸れと御下知在」。

- 天正十五年（一五八七）、雪斎三十三回忌にあたって作成された拈香法語（臨濟寺所蔵）では「尾之田楽窪」とある（『静岡県史』資料編8 中世四・一九三三）。

「空晴るゝを御覧じて」

- 「（急雨石氷を）投打様に、敵の輔（つら）に打付る、身方ハ後の方に降かゝる」
- 車軸の雨
- 信長御覧して中嶋へ御移候ハんと被仰候」
- 「信長、鑓をおつ取て大音声を上けて、すはかかれ／＼と仰られ、黒煙立てゝ懸るを見て」

今川方：朝比奈親徳、鉄砲で撃たれる

永禄三年八月十六日朝比奈親徳書状（写、安房妙本寺文書、『愛知県史』資料編11・二六）

- 「仍不慮之仕合義元討死無是非次第、不可過御推察候、拙者儀者最前鉄砲ニ当、不相其仕場候、雖然至于只今存命失面目候」

- 義元討死、ぜひなき次第
- 拙者儀者最前鉄砲に当、不相其仕場候、
- 只今存命、面目を失し候

- 問

- 今川義元はなぜ自ら尾張国まで出陣したのか。
- 圧倒的に劣勢のはずの織田信長はなぜ勝利できたのか。

- 答

- この勝利で伊勢湾制海権を掌握する
- 伊勢への通路、上洛を日程に
- 降雹（今川方は陣形の崩れ、雨による火器の使用不可、体力の消耗）
- 信長の勝利、降雹を避けえた（砦にいた。雹は狭い範囲）